幼児の教育　第109巻　第10号　平成22年10月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

特集
いま、倉橋と出会う9
「さながら」

10
2010

第109巻　第10号　日本幼稚園協会

好評発売中

“森のようちえん”での活動を撮った18万枚の写真から厳選！

保育・子育てのエッセンスが詰まった写真集

子どもと森へ出かけてみれば

小西貴士／写真・ことば

自然の中で子どもたちは こんなにいい顔するんだな

いろんな葉っぱがあるけれど
同じ葉っぱはないように
あなたはあなたのままでいいですよ
そのまんまが素敵です
森は、そんな風が吹いている場所
ページをめくり
森のお散歩を楽しんでくださいね

24×18cm　76ページ　定価 1,575円（税込）

10920

オールカラー

●四季の森で育つ子どもたちの写真とやさしいことばで織り成すとっておきの世界
●巻末「子どもと森へ」
寄稿：汐見稔幸氏、上遠恵子氏、細谷亮太氏

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第109巻　第10号

目　次

● 巻頭言 ●
子どもの心に美しい糸を織り込む　荒井　洌　4

● 特 集 ●
いま、倉橋と出会う 9 「さながら」　8

水の流るるがごとく、風のゆくがごとく　佐治由美子　9

魂のすがたとしての「さながら」　青柳　宏　12

子どもたちの育ちの力を信じて　高坂悦子　18

「さながら」という言葉をめぐる　井上知香　24

● 園のくらしを育む 7 ●
日本の保育文化（1）— 運動会 —　秋田喜代美　28

乳幼児期の育ちと保育を考える
幼児の教育
第109巻　第10号

最終回
● 絵本で子離れ（3）●
私より幸せになれ　松井るり子 …… 32

● 保育の創意工夫 10 ●
運動会の開会式　前原　寛 …… 38

● 幼稚園の源流を求める旅　森有礼の第二次在米時代（8）●
ニューヘイヴンへ　国吉　栄 …… 42

● 教育学者のあたふた子育て・親育ち（3）●
子どもをもたない保育者の専門性とは（1）　佐久間亜紀 …… 46

● 保育の現場から ●
自然の中の子ども　子どもの中の自然　依田敬子 …… 52

最終回
● お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み（46）●
「幼保プロジェクト」の成果と今後（2）　浜口順子 …… 58

巻頭言

子どもの心に美しい糸を織り込む

――一一〇年目に読む『児童の世紀』――

荒井　洌（きよし）

スウェーデンのエレン・ケイ（Ellen Key）という女性の名前と、彼女が著した『児童の世紀』（一九〇〇年）という本の名前はご存じのことでしょう。

しかし、その本の内容は？　というと、いかがでしょう。タイトルを目にしただけで、何となくわかった感じで済ませてはいませんか？

私は若いころから、スウェーデンを中心にして北欧の保育のことを勉強してきたので、エレン・ケイについても、いろいろと調べたり、書いたりしてきました。

そして近ごろ思うことなのですが、いまから一一〇年前に出された『児童の世紀』に込めたエレン・ケイの主張やセンスは、現代の日本の保育界にとってこそピッタリのような気がしてならないのです。

そこで、『児童の世紀』の中の、これはと思うフレーズのいくつかをご紹介してみましょう。

胸を打つものがあれば何よりです。

なお、訳文は『"The Century of the Child"G.P.Putnam's Sons, New York, 1909』をテキストにして、諸先輩のものを参考にしながら私が翻訳したものです。

> 人生全体において、子どもの時期ほど
> 心の平和を必要とする時はない。

この文章の中の「平和」という言葉なのですが、原文での"peace"には二つの意味があります。それは、戦争に対しての平和と、心の安らぎ、つまり心の平安を意味する内容です。

ここでの意味は後者ですが、エレン・ケイは、世の大人たちが子どもの心の平和を日常的に乱しているという現実を、怒りをもって書きつづっています。

つまり、子どもは、自分がやりたいこと、好むこと、あるいは望むことなどとは、いつも何かしら違ったことをやらされ、あるいは気の向かない方に引きずられてばかりいる、というのです。

> 子どもと遊ぶことができる人だけが、
> 子どもを教育することができる。

『児童の世紀』を読み進んでいくと、この部分には必ず傍線を引くのではないでしょうか。子どもと親しくする人や、その思い出がある人なら、誰しもがうなずく内容だからです。

特に、幼い子どものお世話をする人にとっては、納得の部分です。なぜなら、幼い子どもの気持ちになりきってみるならば、優しくて、明るく、本気になって遊び相手になってくれる年上の人の存在とは、何にもましてうれしい存在だからです。

しかし、エレン・ケイはその後で、子どもらしく装ったり、ごきげん取りなどをするのは最悪だ、とも言っています。つまり、子どもに対してであっても、大人に対するのと同じように、本物の思いで相手となるべきだ、ということなのです。要するに、教育者臭のする、演技ややらせはダメなのだ、ということなのでしょう。

> フレーベルの名言である「子どもたちのために生きよう」は、
> より意味の深い言葉「子どもたちを生かそう」に替える必要がある。

フレーベル（Friedrich Fröbel）については、よくご存じのことでしょう。彼のネーミングによる“Kindergarten”すなわち「子どもたちの園」は、世界中の人たちに愛される名称となりました。

ドイツの中央部、チューリンゲンの森と言われる深い森林地帯での人びとの生活。多分、多くの子どもたちは放っておかれていたのでしょう。ですから、フレーベルが人びとに

「子どもたちのために生きよう」と呼びかけたことは貴重です。

しかしエレン・ケイは、さらに意味の深い次のようなフレーズに替えるべきだと主張したのです。すなわち、「子どもたちを生かそう」というフレーズです。さすがですね。

エレン・ケイは、フレーベルの書いたものも丹念に読み込んでいたことがわかります。

> われわれは子どもの心に、
> 美しい糸をていねいに
> 織り込まねばならない。
> なぜなら、いつの日にか、
> これらの糸が世界をおおう布として
> 織りあがることになるからだ。

エレン・ケイのこの見事な文章、特に説明の必要はないですね。何ともすばらしい文章です。実は、この部分を翻訳するのには、私は少しばかり苦労したのですが……。

とにかく、「世界をおおう布として織りあがる」とは、実に大きなスケールです。このような、世界や歴史を意識しての発想は、まことにエレン・ケイならではの発想です。

私は、ここの部分を翻訳することができた時は、大いなる感動でした。

（白鷗大学名誉教授）

特集

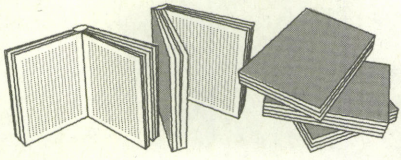
いま、倉橋と出会う 9

倉橋惣三（一八八二―一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問い直す機会にしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

さながら

もちろん教育目的なくして教育はありません。しかも、その目的を必ずしもこちらから押しつけなくとも、幼児の生活それ自身が自己充実の大きな力を持っていることによって、すでにそこに教育の目的に結びつくつながりが見い出せるはずです。つまり、幼児の生活をさながらにしておくのは、ただうっちゃり放しにしておくということでなく、幼児自身の自己充実を信頼してのことです。それを信頼してこそそれを十分実現させてやることが出来るのです。

倉橋惣三文庫1『幼稚園真諦』フレーベル館　二〇〇八年　p.31-32

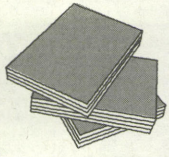


水の流るるがごとく、風のゆくがごとく

佐治由美子

倉橋の保育をひと言で表すとするなら、「さながら」という言葉を思い浮かべる方が多くいらっしゃることでしょう。ところが、倉橋の著書を繙(ひもと)いてみると、「さながら」がまとまった論考として書かれている箇所は見当たらず、『幼稚園真諦』（倉橋惣三文庫1　フレーベル館　二〇〇八年）などに散見されるにとどまっていることに改めて気づかされます。それにもかかわらず、「さながら」の言葉が保育関係者に浸透しているのは、何を意味しているのでしょうか。

一つには、「さながら」が、倉橋の保育思想の中心に位置付いていることによるのでしょう。倉橋の描き出した幼稚園保育法の道筋をたどってみると、それは子どもの「さながら」の生活を生かすことに始まり、設備による保育とその設備を生かすもとになる子どもの自由感が続きます。その上で、子どもが充分に遊ぶことにより満たされてある自己充実、さらに、自己充実ができているかどうかに重きを置く、子どもの側に



立った充実指導、そして、子どもの興味に即して活動に中心を与えていく誘導が加えられ、最後に、幼稚園教育ではほんの少しだけ加えられるとする教導が続きます。この一連の流れの中で、倉橋が「さながら」の生活を保育法の出発点に置いたという事実が、保育関係者に強い印象を与えてきたのではないかと思われます。

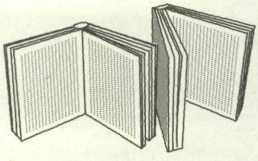
またここで、もう一つ考えを進めるならば、次のような意味が浮かび上がります。子どものさながらの生活を大切にしたい、つまり、子どもが「真にそのさながらで生きて動いているところの生活」を尊重して保育を進めたいという保育者の願いが、実践の中で脈々と受け継がれてきたことを物語っているとみることもできましょう。

（『幼稚園真諦』 p.18～50参照）

生活と生命と

倉橋は、「就学前の教育」（『倉橋惣三選集第三巻』フレーベル館　一九六五年）の「生活としての自然」を説明する文章の中で、「さながら」を次のように表現しています。

「生活としての自然は、こうした自発的、全的なる生活が当然もつところのものであるが、特に、意識をもって作り出され、また作りかえられていないところの、どこまでもさながらなる点を指していう。いいかえれば、生活としての純なるあらわれのままである。その時、生活は無我的であり、没我的であり、一点の自意識も効果意識も伴わない。従って、たとえば水の流るるがごとく、風のゆくがごとく、一切の努力感



をも伴わない。快であって快でなく、苦であって苦でなく、一つにこれ自然である。」

ここで倉橋は、「さながら」を、「生活としての純なるあらわれのまま」と言い換えていますが、ここで言われている生活は少しさかのぼると「自発的、全的なる生活」を指していることがわかります。そこで、この生活の実質を表す「自発的」「全的」という言葉についてここで考えてみましょう。

「自発的」であることについて、倉橋は、「その自発原動が、（中略）内なる生命から発動するものでなければならぬ。」と述べています。自発的なる生活という時の生活を英語で表すとlife、また、内なる生命という時の生命も英語で表すと同じくlifeであることから、倉橋が生活をいきいきとした生命という言葉から説明しようとしていることに気づかされます。また、「全的なる生活」については、「最も具体的な姿」であると彼が説明していることを併せると、生活という言葉は、生命が具体的に現れ出た姿として語られていると考えられます。（「就学前の教育」 p. 427～429参照）

このように、生命の発現を土台に据えた倉橋の保育原理は、幼稚園教育の中で長年にわたって守り伝えられてきたのですが、近年のいわゆる幼保一体化の議論の波間で揺れ動き、そのゆくえが不透明になってきています。社会変化に伴うこのような保育施設上の検討がされていく中で、原点に立ち返って子どもの生活を見つめる視座が、いまこそ必要な時を迎えているように思われます。

（お茶の水女子大学専任講師）

魂のすがたとしての「さながら」

青柳　宏

「さながら」とは

倉橋惣三が折りに触れて使った言葉である「さながら」。この「さながら」にはどんな意味が込められているのだろうか？

私自身は、倉橋の「さながら」は、人の魂のすがた、あるいは魂のあり方を表している言葉だと感じている。具体的に突き詰めれば、魂のすがたとしての「さながら」は、生き生きと人やものにかかわっていくすがた、あるいはひと言で言えば、それは「やさしさ」と呼べるものではないだろうか。「魂」とは、小さな「自我（エゴ）」を超えたものである。人が社会に生きていれば、どうしてももたざるを得ない「エゴ」。しかし同時に、人はそのエゴを超えようとする「やさしさ」を、誰もが心の内に深く宿している。このような「やさしさ」は、生き生きと人やものに働きかけていく「働き」そのものと言ってもよいかもしれない。そのような「やさしさ」こそ、魂のすがたであり、そのすがたを「さながら」という言葉で倉橋は表したかったのではないだろうか。

ところで、倉橋の「さながら」は、「生活」という言葉（概念）と結ばれてよく使われている。たとえば、「子供が真にそのさながらで生きて動いているところの生活[注1]」、「幼児の生活をさながらにしておくのは……[注2]」などである。

しかし、倉橋が「さながら」を「生活」と結んで使ったことが、一つの「誤解」を生み出したように思う。これまでに何度か、倉橋のいう「さながらの生活」とは結局、特定の時代の特定の文化階層に属する子どもの「生活」を指しているのではないかといった意味での倉橋批判を読んだことがある。私は、このような批判は半面において重要な批判であると同時に、半面においては倉橋の「さながら」の意味を取り落としているようにも感じてきた。なぜなら、倉橋の「さながら」は、右に述べたように、まずは人の魂のすがたを表していると思うからである。「さながら」は、時代や文化や社会環境を超えた人（子ども）の魂のすがたそのものを表している。それゆえ、「さながらの生活」とは、魂が生き生きと働いている生活である。もちろん、「生活」は、時代や社会環境や家庭環境に規定されている。しかし、その「生活」の中にはもう一つの生活がある。それは、魂のすがたとしての「生活」と言ってよいかもしれない。幼児には、時代や環境を超えてそのような「生活」がある。あるいは、幼児は、時代や環境に規定された生活と魂の生活の「二重生活」を生きている。思い切って、このようにとらえてみることで、倉橋の「さながら」の意味が見えてくるのではないだろうか。

すべての子どもたちに「さながら」を

「魂のすがた」「魂の生活」「二重生活」などという言葉を使って、非科学的な印象あるいは違和感をもたれたかもしれない。そこで、少し具体的なエピソー

ドを通して、いま一度「さながら」の意味について考えてみたい。

私はこれまで、所属する大学の附属幼稚園の保育の参観、また附属幼稚園で行われている（他の園の保育者を迎えての）研修会に参加させていただいてきた。ある時、その研修会が終わっての帰り道、他の幼稚園から研修会に参加していた一人の保育者に、「先生も『きれいな子どもたち』の保育ばかり見ていないで、もっと違う子どもたちの保育を見たほうがいいですよ」と言われたことがある。おそらく、この保育者が言いたかったのは、次のようなことではないだろうか。

「附属幼稚園に来るような子どもたちは家庭的に非常に恵まれている子どもたちではないか。そのような子どもたちに対しては、その心もちをやさしく受け止めた上で、その子どもたちの遊びをより豊かなものにしていく、という保育の考え方はよくわかる。しかし、私が目の前にしている子どもたちはそのような『きれいな子どもたち』ではない。家庭が崩壊しかかっている子、また家庭には充分な文化的刺激がない子がたくさんいる。そのような子どもたちには、附属幼稚園のような考え方、方法は成り立たないのではないか」

私は、他の園の先生から言われた「『きれいな子どもたち』ばかり見ていないで……」という言葉をおおよそ以上のように解釈した。また、そのように解釈した上で、この「『きれいな子どもたち』ばかり見ていないで……」という言葉に強い反発を感じたことをよく覚えている。

私はこれまで、幼児教育関係の研修、研究にかかわる一方で、スクールカウンセラーとして県内の小中学校の子どもたちとかかわってきた。そして、スクールカウンセリングの場でかかわってきた子どもたちの中には、まさに家庭が崩壊している子ども、

またそのストレスを抱えて学校にやってきている子どもたちがいる。また、そうした子どもたちの中には、そのストレスのはけ口を、授業の拒否、他の生徒あるいは教師への暴力、器物破損、校外での諸々の反社会的な行動に求めている子どももいる。

私は、このような「荒れる子どもたち」にかかわる中でいつも思ってきたことは、「この子たちに『さながらの生活』が保障されていたならば……」、あるいは「この子たちの『荒れ』の根本は、やはり『さながらの生活』が保障されてこなかったからではないか」ということである。言い換えれば、乳幼児期（さらにはそれに続く時期において）、その子の「さながらの魂」が大切に育まれていたならば、このように荒れることはなかったのではないか、という思いである。

もちろん、思春期においては、大人離れをしていく中で、これまで従ってきた権威への反発が生まれ、個性によってはそのあり様が「非行」としてとらえられることはある。その場合には、いわば発達の必然としての反発・非行と言えるだろう。しかし、子どもたちの中には、発達の必然としての反発・非行ではなく、発達が阻害されてしまったがゆえの反発・非行の症状を呈している子どもがいる。すなわち、乳幼児期から、自己を発揮することが阻害され、その結果として自尊心をもてず、また他者への思いやりをうまく育むことができなかった子どもである。このような子どもたちに、もし「さながらの生活」が保障されていたならば、と私は思う。

蛇足ながら言えば、この「さながらの生活」とはもちろん、「経済的あるいは文化的に恵まれた生活」ということではない。そうではなく、子どもが本来もっている魂のすがたとしての「さながらの生活」である。子どもの属する経済的な生活階層を超えて、どの子どもにも「さながらの生活」を保障し

なくてはならない、それが倉橋がもっとも強く語った思想であると私は思う。

「さながら」の場としての日本の幼稚園

日本の幼稚園は不思議な場である。私のような者でも、たとえば三歳児の保育室に入っていけば、そこでゆっくりとした時間が流れ出す。何やら紙を切っている一人の男の子のそばの床に座る。すると、その子が顔をあげて私を見つめる。そうすると、私は知らず知らずのうちにその子の「心もち」を感じ始めている。半ばその子を見つめ返しながら、一度床に投げ出されたはさみをゆっくりと拾ってその子に手渡す。その子はまた何やら切り始める。次に、その子は切った紙と紙をセロハンテープでつなぐ。どうやら「新幹線」を作っているようである。次に、その子は洗濯ばさみを幾つか持ってきて「新幹線」の下部に挟む。なるほど、こうするとぺらぺらの紙の「新幹線」を床に立たせることができるのである。また、立たせるだけでなく、走らせることもできる。

「新幹線」ができ上がったところで、その子は今度は積み木で「トンネル」を作り始めたようである。トンネル作りを始めたその子に、私はゆっくり積み木を手渡していく。そして、「トンネル」ができ上がり、「新幹線」をくぐらせて走らせる。しかし、少しすると、その子は、私に、にこっとわずかに微笑みながら、新幹線から洗濯ばさみをはずして、すっと立ち上がり、保育室を出て行く。私もゆっくりと立ち上がりその後を追っていくと、その子はひらひらする「新幹線」をはためかせながら、広い園庭いっぱいに走り始めた。「新幹線」を光と風にはためかせながら園庭いっぱいに、幾度も走り回る子。一つの「さながら」のすがたである。

幼稚園という場に入ると、私のような「部外者」にも、子どもとの間に一つの関係性が生まれてくる。

言ってみればそれは、子どもと共に「さながら」を実現していく関係性である。私は、倉橋惣三は、「さながら」、「心もち」などの言葉（思想）によって、日本の幼稚園という場そのものを創造したのだと思う。日本の幼稚園における「さながら」を実現していく子どもと大人の関係性は、たとえば（遊戯療法を含む）カウンセリング的な関係性とも異なるものであると思う。カウンセリング的な関係性の中では、やはりどうしても子どもを「クライエント」として見て、子どもの「問題」を何らかの意味で「解決する」という意識から自由になれないのではないか。それに対して、「さながら」を実現する関係性は、「クライエント」、「問題」という枠組みを超えて、人のもつ本然の心の可能性（可塑性）を実現する関係性であると言えるのではないだろうか。

現在のいわゆる幼保一元化（一本化）の議論で心配なのは、所管の統合という論理によって、幼稚園がこれまで創りあげ、伝え続けてきた、幼児の「さながら」を実現、尊重するための、幼児とかかわるリズムそのものが壊されてしまうのではないかということである。保育所・保育園にそのリズムがないというわけではない。しかし、そのリズムは、日本の幼稚園ならではの卓越した特性・独自性であると思う。その場に入ると、自然にそのリズムが体の中に浸透してくるように思う。このような「見えない」ものこそ、幼稚園教育の核心であろう。それをこれからも大切にしていけるような制度改革をしなければ、100年を超えて創造された伝統をこれからの世代に伝えられなくなってしまうのではないか。

（宇都宮大学教育学部教授）

注

（引用文献）

1　倉橋惣三文庫1『幼稚園真諦』フレーベル館　二〇〇八年　p.24

2　1に同じ　p.31

子どもたちの育ちの力を信じて

高坂悦子

私は現在お茶の水女子大学いずみナーサリー（以下、ナーサリー）で非常勤として保育の仕事をしています。それまでは〇～五歳児までの定員百名の保育園に勤めており、出産、仕事復帰、出産を繰り返し、現在は三人の子と育ち合う母でもあります。

さながらのかかわりあいに思いがあふれて

保育園に勤めていたころは、子どもたちと過ごす時間はたっぷりとあり、あせることもなく、毎日の生活の中で私が子どもたちを大切に思う気持ちを伝え、子どもたちの思いを受け入れ、成長を感じ合いながら過ごしました。そのような日々の中で、お互いを思う気持ちや、仲間とつながり合う心地よさを育み、言葉にせずとも、何だかお互いの思いが通じ合っているなあと感じる時の喜びはとても大きいものでした。

保育園勤務時代に、たとえばこんなことがありました。年長児を担任していた時のことです。三人兄弟の末っ子のEちゃんはいつもお昼寝の時間に、「先生、来て」と保育士を呼びます。すぐにそばに行け

る時もあれば、ほかの子どものそばにいて、なかなか行けないこともあります。その日はいつものようにEちゃんに呼ばれながらも、ほかの子どもについていました。ふとEちゃんを見ると、ぽや～とした心地よい表情でいまにも眠りそうです。その気持ちよい時間を大切にしようと思い、あえてそばには行かずにいると、

「先生、来なくていいよ」とEちゃんが私に声をかけました。私は声を出さず、そっとうなずきました。しばらくするとまた

「先生、来なくていいよ」と言います。私は静かにそばに行き、

「Eちゃん、一人で眠れるんだよね」と声をかけました。

「うん」とうなずき、Eちゃんはすやっと眠ったのです。

これは毎日の保育の中のほんの小さな小さな出来事です。でも、いつも大人がそばにいることで安心して眠っていたEちゃんが、大人がいなくても、自分で眠れるんだよ！　と私に訴え、自分自身でそうすることができると自信をもてた大切な大切な瞬間でもありました。その時を共に迎えられたことは、私にとっても大きな喜びでありました。

このような出来事が日々の保育の中にはたくさんあります。時には支えとなり、時には信じて見守るなど、その時々の子どもとのかかわりにより配慮も変わっていきますが、どうしてそうしたのか、そうするべきと思ったのかは、その時の子どもと私とのかかわりから生まれてくるもので、自然とそうなっていく、まさに「さながら」のかかわりと思えます。

このような保育園時代の思い出は、いま思い返しても胸が高鳴るほどのぜいたくな時間です。

いま、保育の現場は多様化しています。現に、いまナーサリーでは、利用日数が人によりさまざまで、週に一度の登園の子どもたちもいれば、週二日、

週三日、一時預かりでの登園の子どもたちもたくさんいます。一時預かりのように、初めてナーサリーに来て、数時間のみ過ごす子どもたちにとっても、少しでも心地よい場となるようにと保育士は願います。一度だけの利用であっても、その場限りの出会いととらえるのではなく、短くても、一回でも、心豊かに育つ大切な時間を私たちが共にするのです。これはとても責任があると共に、人と人とがかかわり合える貴重な時間を得たことでもあります。残念ながら、ゆったり時間をかけて関係を築くことはできませんが、精いっぱいの思いを伝え、受け入れていきます。「大丈夫、あなたと一緒にいるからね」、「大丈夫、ここで少しでもあなたが気持ちよく過ごせるようにしていきましょう」と。心を込めて。

私の感触としては、その思いは子どもたちに届いているよう感じます。まなざし、抱かれた体の感触、体温、そして言葉かけ。大人よりも素直に身体いっぱいで感じとる子どもたちの自然と備わった能力がそうさせる、それは必然なのだと思います。

大人の温かな思いを敏感に感じとる子どもたちはそうでない時の思いも、感じていることと思います。たとえば、遠方から通う子どもたちは、電車の中では、小さいながらも周りの人や、親の思いを表情や雰囲気から感じとることでしょう。大きな声を出したりすると親が何とかなだめようとしたり、困ったりします。それ以外にも。子育てをしながら親が背負っているものはたくさんあります。時にどうしてもそのままのわが子の姿を受け入れられず、こうあってほしい、こうあるべき、という思いが子どもの行動や思いに制止をかけてしまっていることも少なくないと感じます。「頑張って」とか「練習しよう」なんていう言葉が聞かれると、少々戸惑いを覚えます。もちろん愛情あってこそのことでしょうが、保護者の気持ちが先行してしまい、実際の子どもは少し窮屈な思いをしているのでは、と感じることもあります。親と子どもの気持ちのズレという

のでしょうか。正直、私自身も自分の子育てを振り返ると思い当たることがあります。

しかし、保育者としての私は、子どもたちには自分の思いをそのままに出してほしいと願っています。いやだ、いやだの気持ちも、母を恋しがる思いも、体調がすぐれずグズグズするのももちろん。それらを出し合いながら一緒に日々を過ごしていきたいと思っているのです。未来に向かって。

変わりゆく中にも変わらず大切にしたいこと

現在二歳児のYちゃんの事例を紹介します。Yちゃんは、仲良しだったお友達が四月から幼稚園に入り、それまでの担任も〇歳児の担当となり部屋が別れてしまいました。朝登園すると、以前の担任を求め、〇歳児の部屋へ行きます。食事の時は椅子にこだわりをみせ、青の椅子を求めます。お弁当は好きなメニューでないと「食べない」と言ってみたり、午睡の布団は隣の人を指名したりします。

これらの行動をどう受け止めていくか、職員間で話し合いました。言って聞かせれば理解もできます。「ダメなんだよ」と制止することもできます。しかし私たちは、Yちゃんの思いをくんでいき、方向性を示したり、自分で選択して決める手伝いをしたりしていくことにしました。〇歳クラスに行きたいと言う時は一緒に行き、赤ちゃんの過ごす様子を一緒に見たり、散歩のしたくをしていれば、

「後から行くからね」

と〇歳児クラスの人たちに伝え、ルンルンと部屋に戻り、散歩のしたくをしたりしました。うれしい思いも、何だか納得できない気持ちも、一緒にわかり合うようにしました。

変化は確実に現れ、食事の椅子は、人数が多くて青がない時は、

「しかたないね」と、共に残念がることができるようになりました。

「〜ちゃんの隣がいいよ」と言う時は、

「〜ちゃんが好きなんだよね」と伝えると、
「うん。好きなの」と安心した表情で笑います。がむしゃらに思いを伝えずとも大丈夫と感じてくれているように思います。

つい先日は、午睡明け、まだ眠くてグズグズ言いながらも、しっかりと甘えを出し、私のひざでおやつをおかわりして食べた後は、
「ごちそうさま」とニッカリ笑って遊びにいきました。お迎えの時は
「また遊ぼうね」と伝えると、
「うん。また明日遊ぼうね」とにっこり笑って帰ります。Yちゃんの心が動いているのです。なぜそうなるのでしょうか。

私が考えるに、こうしたい、こうさせたいと思う時点で、子ども自身を否定していることにつながってしまっているのではないでしょうか。子どもはそもそも、育ちの力をもって生まれてきているのですから、その力を信じ、寄り添い、私たちの願いを心にもっていればいいのではないかと。願いとは大きなハードルではありません。いまはまだ小さな集団にいるあなたが、この先大きな社会に出た時に自分をしっかり愛せること、周りの人を大切に思うこと、力を合わせていくこと、あなたのために……と願う思いは伝わるのではないでしょうか。

もう一つ、私たちが大切にしているのは生活のリズムです。年齢や月例でグループを分けるのではなく、その日の一人ひとりの状況に応じて食事時間や午睡の時間を毎日考えていきます。朝早く起きた

子、遅く目覚めた子、体調のすぐれない子、眠たい子。一人ひとりによいと思われるリズムをつくっていくことで、心地良く食べ、眠ることができるのです。それは身体と心の安らぎにつながっていると確信できます。そして、一人ひとりの安らぎは、個々のものとしていつまでもバラバラなのではなく、保育の場全体の心地良いリズムにつながります。

一人ひとりのそのままを受けいれ、願いをもって寄り添うこと。そして、たっぷり遊び、食べ、眠ること。身体も心も健やかに、また心地良く明日を迎えられるようにと。これも「さながら」。

何がよいとか、こうするべきとかではなく、私たちも流動的にその時その時の「さながら」であること。それを可能にするためには、保育士間の連携が要となるでしょう。普段から周りをしっかり見て、子どもと大人の動きを知っておく。いつもと違う様子で、子どもが特定の大人を求めた時は、求められた大人がしっかりと応じ、ほかの大人がそれが可能となるよう、そのほかのことをしっかりとサポートしていく。「さながら」の関係をみんなで認め合い、つくり合う、とでもいうのでしょうか。子どもが特定の大人を求めるのは、ごく自然なことでしょう。その思いに応えていけば、子どもは自ら大人の手を離れ、自分から視野を広げ、周りの人とのかかわりを求めていきます。

この、ごく自然な「さながら」の保育を実践するのは、実は意外と難しいことかもしれません。これを少しでも可能にするために、私たち保育士は努力を重ねていくべきでは、と考えます。保育士同士、子どもたちの健やかな成長を願う思いに違いはないのですから。保育士も含め、保護者も、そしてもちろん子どもたちも、それぞれが自分らしく、みんなで育ち合っていけること。

保育の場はそんな場であってほしい、と願っています。

（お茶の水女子大学いずみナーサリー）

「さながら」という言葉をめぐる

井上知香

実際のところ「さながら」という言葉を私はこれまで生きてきた中で一度も使ったことがないことに思い至りました。ところが、不思議と漠然としたイメージをつかむことはできてしまいます。辞書に目を通すと、あながち自分のとらえも遠いとはいえません。しかしながら、説明しようとすると言いよどんでしまいます。そこで、本誌面をお借りして少しずつでも自分で語れる言葉を探索してみたいと思います。何となくわかったような気になる……のではなく、いま一度じっくりと「さながら」という言葉と向き合っていきたいと思います。

「さながら」とは

日本国語大辞典[注1]においては、「さながら」について以下のように説明がなされています。

【さながら】（副詞「さ」に助詞「ながら」が付いてできたもの）

①すでに存する事物、事態が不変の姿であるさまを表わす。そのまま。もとの通り。
②すでに存する事物、事態が量的に不変であるさまを表わす。そのまま全部。全部そっくり。
③文脈上または心理的に問題になっている事物、事態を、既知の事物、事態になぞらえるときの、同一感を表わす。まるで。あたかも。

倉橋が使用している「さながら」の意味は、ここでは①ととらえるのが妥当ではないかと思われます。もしくは②の意味とも近いのかもしれません。さらに、副詞「さ」には「前に示されていることを受けて、その事態を示す語。そう。そのように」という意味があることを確認すると、倉橋の述べた「生活をさながら」にしておくとは、すでに営まれている子どもの生活をそのままにしておくという意にとることができます。

浮かび上がる二つの世界

このように「さながら」の意味をいま一度立ち止まって考えてみると、あるがままの子どもの姿をとらえることであったり、子どもの思いを受け止めることであったりといった「いま」のことのみに向くのではなく、そこにはさらに広範な次元を内包するような時間の移ろいを感じとることができます。ある子どもの生活が営まれていていた世界と、その世界を意識して保持しなくてはならない世界……。少々大げさな表現になってしまいますが、そこには「幼稚園」というものを日本の社会に組み入れた瞬間を起点として生じた、前後の異なった世界の存在が浮かび上がってくるように感じられるのです。

倉橋惣三の後にお茶の水女子大学附属幼稚園において園長を務めた坂元彦太郎は、その著「倉橋惣三・その人と思想」において、倉橋の主著それぞれ

を改めて読み解く中で、彼の生涯とその時代や思想の展開について整理しています。その中で倉橋が講演で語ったある言葉を紹介しています。それは、前述した異なった世界の存在の立ち現れを想起させるようなものでした。

「人間の生活は、原始時代のようにかんたんではなくなり、いまは、最小の努力で最大の効果をあげるために、実生活から教育が分離されることになった。そこで、教育を行う専門家が、教育を行う特別の場所で、全力をあげて生活から分離した教育をいとなむことになった。[注2]」

子どもの生活

当時〝幼稚園〟というものの存在、その内容が人々の間において、ましてや子どもたちにとってはなおさら当たり前のものではなく、特殊性を帯びるものであったことが推察されます。

すなわち、倉橋が子どもと向き合って生きた時代においては、（それまでの子どもたちの生活がいかなるものであったのかについて、ここでは触れることができませんが）ある生活をいとなんでいた子どもたちにとって「幼稚園」で生活するということは、子どもたちのそれまでの日常を崩すものであり得たのかもしれません。

だからこそ、多分に大人の恣意性が含まれた〝幼稚園〟設立の背景とその内容の実際を前にして、倉橋は「幼児の生活を真実にさせ[注3]」ることに主眼を置き、「生活を生活で生活へ」と唱え、子どもの生活本位を強調したのではないでしょうか。上段で引用した言葉の続きで倉橋は、「幼稚園で、人や場所は、実生活から分離しても、教育の方法を実生活から分離する必要はない[注4]」とも述べています。

現代においては、当たり前のように浸透している〝幼稚園〟が、その設立当初においてはそうではな

かった。いま、子どもの姿を中心に据えた保育のいとなみをとらえようとする時、そもそも〝幼稚園〟というものが、人々（子どもたち）の間において当たり前に存在するものではなかったという成立背景を認識する必要性を感じます。

さながらの生活

このように「さながら」という言葉をめぐる中で、幼稚園において観察をしている時に出会った一人の子どもの姿がふいに思い起こされました。

その時、座りながら子どもたちや先生の様子を見ていた私の耳に、かすかなメロディが聞こえてきました。音を最初に耳でとらえた私は「ああ、鼻唄だ」と感じました。そして辺りを見渡すとすぐ近くに、朗らかに一人で遊んでいる子どもが目に飛び込んできたのでした。誰に聞かせるでもなく自然に出てきたのであろうメロディーを聞いて、私はなぜだかわからないけれども、心地良さを感じると共に、とてもほっとした気持ちになったことを覚えています。とても印象深く。

（お茶の水女子大学大学院博士課程）

注

1 日本国語大辞典第二版編集委員会　小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典　第二版　第六巻』小学館　二〇〇一年

2 倉橋惣三文庫9『倉橋惣三・その人と思想』坂元彦太郎著　フレーベル館　二〇〇八年　p.50

3 倉橋惣三文庫1『幼稚園真諦』フレーベル館　二〇〇八年　p.22

4 2に同じ　p.51

園のくらしを育む7

日本の保育文化（1）－運動会－

秋田喜代美

1　運動会という行事文化

九月の終わりから十月にかけては、どの園でも運動会が行われる季節です。欧米の保育研究者に日本の運動会のＤＶＤを見せると、必ず興味をもたれます。それはある意味で、園児と保護者が一体になって行う特別な行事という文化的儀式であり、マラソン大会やバザー等とはまた違った働きをもっているからのように思います。行事の精選が唱えられても運動会がなくなることはないでしょう。それは、子どもたちの運動を大人が見守ることで成長を共に喜び合い、子どもも行事を通して挑戦し、達成感をもち、一つ大きくなる節目になるからです。ブルーナーが『教育という文化』[注1]の中で「文化はそれ自身、人間の作り出したものではあるが、それは人間の心独自の働きを形作るとともに、その可能性を生

み出していく」（p. 4）と述べているように、運動会という文化的行事は、大人にも子どもたちにも発達の可能性をつくり出していく一つの大きな出来事です。「集合的作品は集団の連帯意識を生み出し、保持させる」（p. 29）、「教育システムとは、文化の中で成長する子どもたちが、その文化の中にアイデンティティを見出すのを助けるものでなければならない」（p. 55）というように、運動会は園の一員というアイデンティティや、私たちの園、私のクラスという絆をより強めていくと思われます。

私は、文化的な行事のよさの一つは、一つの目的に向かって行われているように見えながら、そこに非日常からくる多層的な意味が生まれていくところにあると感じています。

運動会が子どもの発達の質の変化となる期の節目になり、さまざまな育ちの姿が見えてきます。寺川智祐先生からうかがった、以下のお話[注2]が心に残っています。

「チハルさんは三歳の時のかけっこで一等賞でした。そして四歳になって転園した幼稚園でもまたかけっこで一等賞でした。チハルさんの母親が保育者に語ります。『年少組のかけっこも一等賞を取って、その時はぴょんぴょんはねて本当にうれしそうでしたが、今年は家に帰るなりこんな絵を描いて、年少の時のように喜びませんでした』。チハルさんが描いた絵は三人の子どものうち、一等賞になった私は大きく万歳をしています。けれどもその脇で、一緒に走ったゆきちゃんとみきちゃんは、肩を落としてまゆがハの字に表され、私よりも大きさも小さく描かれていました。自分のうれしさだけではなく、その一人の万歳が、実はいつも遊んでいる仲良しの友達の残念を生み出していることに気づいたこ

とに母親はチハルちゃんの成長を読み取っているのでした」

「うちの子、こんなことができるようになった、前より速くなった」「ほかの子よりできている」というような、身体の伸びや運動能力の発達の喜びではなく、出来事を通しての人と人との葛藤への気づきや落胆もまた、誰もが真剣に取り組む活動だからこそ子どもの中に生まれていき、それがまた発達の次へのバネになるのだと思われます。

2　運動会の準備と片付け

運動会の目的は、活動への挑戦や運動への楽しみを育てることとして一般には語られるでしょう。しかし「みんなのくらし、公共の場での振る舞い」という視点を生み出す一つの転機でもあります。運動会ではさまざまな大きな道具等もしばしば使われます。プログラムを行うための道具の出し入れをみんなで共同ですること、つまり協力し合って物を運んだり片付けたりすることが進行のために必要であることを実感します。運動会は一度きりではなく、その前に練習が繰り返されます。その中で子どもたちは共同の大きな物を協力して片付ける所作も、文化的活動の中に埋め込まれ自然に学んでいきます。

私は、保育における片付けの研究に、共同研究プロジェクトでこの四年間ずっと取り組んでいます。子どもの片付けは保育の中で一年を通していかに発達し、どのように保育者に支援されるのかをビデオや面接で考え検討してきました。そして、自分の物を自分で片付ける、友達の物も一緒に片付けてあげる、という年度前半の育ちから、みんなの物をみ

んなで協力し片付ける、という意識への変化が、特に運動会の中で育てられるのではないか、という議論がなされました。もちろんそれは各園の保育文化により違うことでしょう。片付けだけではなく、列になって歩くことの必然性も大勢で限られたスペースを使う時だからこそ運動会の中では指導され、子どもの中に芽生えます。指導が過度になれば、軍隊の行進のようになってしまいます。「子どもの笑顔が消える指導はしないで」と私は練習を見せてもらう時にはお話しします。その子らしい動きの中で、しかし行事だからこそ文化的所作や身のこなしを学び、みんなの中での私の役割、私の独自性を見出していくのではないでしょうか。それが、ブルーナーのいう「文化の中にアイデンティティを見出す」行為の一つの現れではないかと思います。各園で保育文化を受け継ぎながら、新たな文化の創り手に保育者と子どもたち、そして保護者がなっていくこと、この営みが一つひとつのくらしや行事の中でどのようになされているのかを改めて確認し合うのが、行事の振り返りの時なのではないでしょうか。

（東京大学大学院教授）

注

1　J・S・ブルーナー著　岡本夏木・池上貴美子・岡村佳子訳『教育という文化』岩波書店　二〇〇四年

2　寺川智祐　「まことの保育に生かそう　教育の理念」平成二十二年春季真宗保育連盟講演資料　二〇一〇年参照

絵本で子離れ（3）

私より幸せになれ

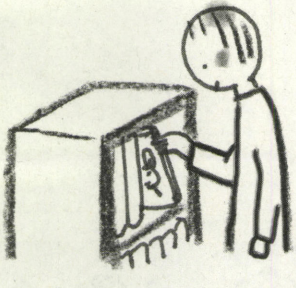
松井るり子

●母の賢さを知れ

風が冷たいから、手袋をして行きなさいと言うのに、自転車通学の高校生の息子は、「いらーん」と突っぱねて家を出て行きました。その背中に向かって、「そうだよね。冷え症オバサンと違って、若いんだから平気だよね。平気だといいね」と思う私と、「何を言うか。いまはよくても、学校まで四十分も自転車に乗ったら、風で冷え切ることがわからんか。今回わかって、『自分は間違った、未熟だった、考えが甘かった。正しいのは御母上だった』と思い知るんだねっ」と思う私と、両方います。

「これが呪いだ！」とハッと気づいて、ひるみます。わが子に呪いをかけるなんて、あり得ないと思っていたのに、ぼんやりしていると、こんなふうにやってしまうと知り、愕然としました。

母親が息子を呪う話なら、知っています。ジェームズ・リーブズ著　中野好夫　谷村まち子訳「金のたばこ入れのふしぎ」（『オクスフォード世界の民話と伝説1イギリス編Ⅰ』に収録　講談社　品切れ）



むかしむかし、深い森の中に貧しいきこり夫婦と、一人息子のジャックが住んでいました。大きくなった息子は、世の中へ出ていきたいと思い、母親に許しを請います。「いいとも」と、母親は言いました。「食べものをいろいろ用意してあげるから、すぐにでかけなさい。小さなおかしでも、おまえがしあわせになるようにという、かあさんのいのりがこもっているほうがいいか、それとも、かあさんにのろわれても、大きなおかしを持っていきたいか、どっちだね」

マザーグースの「かあさん泳ぎに行っていい？」にも似ていますね。「もちろんいいわよ、かわいい子」に続く、機嫌のよいお答えの結びは「でも決して水には近づかぬこと」でした。まったくもう、どこが「もちろんいい」んですか？　でもね、このかあさんの気持ちは、いまになると、よーくわかるのでした。子どもを外に出す母親の心配そのものです。

●呪いと言祝ぎ

ジャックの母親も、「いいとも」と機嫌よさそうな即答をしたわりには、妙なことを言い出します。小さいお菓子を「祈り」と、大きいお菓子を「呪い」とくっつけて、さあ選べと差し出したのです。子どものころの私には、彼女への批判はありませんでした。親の言うことは天災のようなもので変えられず、受け入れるしかありません。せめてこの子に私の考えをカンニングさせてやろうと念じながら読みます。大きいやつはダメだジャック。三人きょうだいのこういう話だと、上二人が大きいお菓子で失敗、末息子が小さいお菓子で成功と、筋書きは決まっているでしょう。あんたは一人っ子だから、最初からうまくやらなくちゃ！

私がそう言っているのに、ジャックは聞きません。「それなら、大きいおかしをください。道が遠いか

ら、とちゅうで、おなかがすくといけませんから」ですって。ああ、もう知らん。

いまになってみると、老母がわざとけちくさい質問を出したのは、息子を混乱させて、旅立ちをちょっとでも遅らせたかったためかなと思います。そんな小細工を、息子が「馬鹿らしい」と振り切るかのごとく、母の呪いもなんのその、自分の食欲を最優先しているところが、健全な頼もしさに思えます。

私も子どもにあれこれ言うのと並行して、「こんな母なんか、本気で相手しなくていいからね」と思っているところも、あったかもしれません。弱気な私と比べて、ジャックの母は、憎まれ口ともいえる息子の選択、呪いつきでいいから大きなお菓子をよこせという回答に、負けていません。望みどおりの大きなお菓子をやって息子に別れを告げると、「やねにのぼって、むすこが見えなくなるまで見おくり、のろいつづけました。（うちのジャックは、年とった母親をのこしていく、親不孝なむすこです。やさしい心のない子には、ふしあわせと大きな苦労がつきまといますように！）」

息子と別れた後に、わざわざ屋根に登って、姿が見えなくなるまで、ほんとに呪うなんて。こんな人、変質者だわ。全然わからん。キライと子どものころは思いました。そのくせ自分が老母のお年頃になってみると、私も子どもに同じことをしているのでした。そうと気づいてあわてて「呪い修正のお祈り」なんかをつけたしながら、自分がまた一歩ジャックの母に近づいたことを、苦々しく思うのです。

こういう母親をもったにもかかわらず、最後にはジャックが伴侶を得て、幸せになるのが救いです。必ずしも、賢母でないと子どもに福が授からないわけではないみたいです。本当によかったです。

となると、うちの息子たちが時々とってくれる「カンケーねーよ」みたいな腹立つ態度が、頼もしく

さえ思えてきます。愚かな母の「子どもが心配」「自分が寂しい」「時が経つのは切ない」「私から離れてどこかに行ってほしくない」などの、天真爛漫な心もちは、もってもいいけれど、本来、自分の中で処理するべきことです。その気持ちの裏返しが、つい呪いとなって口から出てしまっても、子どもは蚊取り線香の灰ぐらいに「うぜえ」と思って振り払って、自分の道を進むことでしょう。ありがたいです。

この話にはもう出てこないジャックの母は、息子を呪ったことで、大きな印象を残したのは確かです。これはこれでなかなかのやり方だったかもしれませんが、自分のこととして考えると、子どもの人生から呪いで退場だなんて、悲しすぎます。どうせなら芥川龍之介『老いたる素戔嗚尊（スサノオ）』のような、言祝ぎで退場したいです。スサノオは、無理難題をふっかけて追い払おうとした婿殿が、娘をさらっていくのを、「おれよりももっと仕合せになれ！」と、祝福で見送りました。

「呪い」と「祝い」の違いは、漢字でもほんのちょっとですしね。ジャックのお母さんもここでもうちょっと頭を働かせたら、呪いたいほど悲しかったのは、親の役目の終焉（しゅうえん）と、自分の老いと、やがて来るこの世からの退場であるとして、離れ行く息子とは、分けて考えられたはずです。

ぼんやりしてると、そこを分けて考えられないでしょ？　と教えてくれる、「金のたばこ入れのふしぎ」は、怖くて、大事な話です。

●「わけぇの、はたらくんだ」

小さかった子どもたちは、お話に出てくる「悪いやつ」が大好きでした。たとえば、ジャック・ガントス作　ニコール・ルーベル絵『あくたれラルフ』（いしいももこ訳　福音館書店→童話館出版）

あくたれねこのラルフは、飼い主セイラの人形の

首をむしり、セイラの乗ったブランコの下がっている木の枝を切り落とし、テーブルのクッキーをどれも一口ずつかじり、自転車でテーブルに突っ込み、鳥を追いかけ回します。全部全部、小さな良い子のあこがれの遊びです。自分ではやりません。絵本の中の悪い子にやってもらってにんまりです。

このあたりまでのラルフは、渋い顔のおしかりを受けるぐらいですみましたが、家族で見物したサーカスでひどい妨害をした時には、とうとう愛想をつかされ、置き去りにされました。ラルフは容赦なく、サーカスの最底辺の仕事にこき使われます。ナイフ投げの的になるのを断ると「おい、わけぇの、ここじゃ、だれでもみんな、はたらくんだ」と、檻(おり)に放り込まれます。いいせりふです。うちのわけぇのにも、家にいる間にもっと働かせておくんだったなーと、このキッパリがうらやましいです。

サーカスの食事はひどくて、すっかりスリムになったラルフは、檻をすり抜けて逃げ出しましたが、町も甘くありません。やくざねこはいるわ「なまごみねつ」にかかるわで、寂しくなって泣き出しました。ちょうどそこに、飼い主のセイラがラルフを探しにきて、無事帰宅。以後よいねこを志しますが、ロブスターがお皿に載った時だけは、どうしても我慢できずに「あくたれてしまうのでした」。

ラルフをサーカスに置いてくる時、セイラは大粒の涙をこぼしています。セイラはラルフに愛想をつかしたのではなかったのでしょうか。つかしました。それでも泣けてしまうのです。心と頭の分離は、いつだってこんなふうに苦しいのです。他人事とは思えません。

しばらく帰省していた末っ子が、新学期に備えて

寮に帰って行った後、私の砂時計の砂が、がさーっと音を立てて一挙に落ちてしまった気がして息苦しくなり、「何だこれは。おかしい。鬱か。更年期か」と言いながら、家の中をうろうろと歩き回りました。一時間で治りました。ヒステリーでしょう。

セイラが苦しい思いに耐えて、ラルフを断固家から出したことは、あくたれ矯正によく効きました。しかも依然としてあくたれの余地が一点残っているところが、絶妙によいです。いつもこんなふうに、うまく行くといいですね。悪くすれば、あくたれる舞台を、家から外に安易に移した罰として、目玉が飛び出るような請求書つきで帰ってくる。あるいはこわいお兄さんたちが、背後にゾロゾロついてくる。あるいは「なまごみねつ」で、のたれ死ぬ。などなど、いろいろと悪いことばかり想像してしまいます。いまのところ自分が知らない苦労よりは、いま見えている苦労のほうがましかもしれないという理由で、現状維持という結果になってしまうのでした。ずうたいのでかい子どもの教育は難しすぎます。

まだちゃんとしつけができていないのに、うっかり手放してしまった気がします。「ええ子なんですけどねー」という言い訳はありますが、それで通用するほど世間が甘いとも思っていません。なのに、こうなってしまって、ごめんよ、ごめんよと思っています。あとはもう、自分で自分を育てるしかないのでしょう。

それを言えば私も同じです。いまの私に必要だからやってきたんだなと思った映画を、最後に挙げておきます。

「マルセルのお城」「オールアバウトマイマザー」「ヘヴン」「ククーシュカ　ラップランドの妖精」。ぜひどうぞ。

（文筆業）

＊この連載は今回で終了いたします。

保育の創意工夫 10

運動会の開会式

前原　寛

秋は運動会の季節です。九月から十月にかけて多くの保育園や幼稚園で運動会が行われていることと思います。私自身、他園の運動会に招待されることもあります。そのような時、開会式でのあいさつが多いなとか、長いなとか感じることがあります。

私は保育園の園長をしていたころ、運動会の開会式であいさつをしたことがありません。これから運動会が始まるぞ、と気持ちを高揚させている子どもたちに話をしても、届くとは思われないからです。

開会式で大人があいさつしていると、子どもたちがつまらなそうにしている様子が見られることがあります。実際、ある園で園長先生の話がいつまで続くのかと思われるぐらい長く、子どもだけでなく参加していた保護者まで含めてげんなりしてしまったこともあります。

保育園の運動会は子どもたちのものです。そう考えているので、私のかかわっている保育園では、開会式で始まりの言葉を、五歳児を中心に子どもたちが発声します。園長や保護者、来賓のあいさつはありません。

また当園では、開会式の際に、一般的な入場行進もしません。入場門の外に整列し、そこから行進してグラウンドを一周するようなやり方をしていないということです。四、五歳児ならばともかく、二歳児や一歳児の中には、入場行進そのものを嫌がる子もいます。当園の運動会は園庭で実施しますが、三歳児であっても、いつもの保育園と全く違う雰囲気にのまれてしまって泣き出してしまう子もいます。そんな子はとても入場行進をするどころではありません。

ある年のことです。運動会を数日後に控えたある日、三歳児が私に向かって、「運動会におじいちゃんもおばあちゃんも来るんだ」とうれしげに話してくれました。それを聞いてはっと気づきました。その子の言い方には、運動会には自分の家族や親戚だけが来る、というニュアンスが感じられたからです。

運動会にはたくさんの方が来られます。一人の園児に十数人の家族・親族が来ることもあります。70人の園児ですと、数百人以上の大人が来ていることになります。運動会を行う園庭は、広くありません。見に来ている人たちは、大げさでなく園庭からはみ出すようにしています。普段は子どもしかいない保育園に大人がぎゅう詰めになっているのですから、雰囲気もまるっきり違ってし

まいます。万国旗などの飾りもありますから、子どもにとっては異様な雰囲気に思えるでしょう。

先の三歳児の発言のように、小さな子どもたちは自分の家族・親戚だけが見に来てくれるようなイメージをもっています。家庭で、「今度運動会に行くからね」と話しかけられる言葉は、子どもにはそう理解されているでしょう。

ところが当日になると、見知らぬ大人が園庭にぎっしり詰まっていて、自分の家族はちょっと見渡しても気づかないような状態になってしまいます。四、五歳児であれば、それまでの経験も踏まえて、そのような場での振る舞い方を身につけています。しかし、一、二歳児にそれを期待するのは無理です。中には、はしゃぎ回ってところかまわず走りまわるような子もいますが、むしろ圧倒されてしまい、泣き出したり、おじけづいたりする子どものほうが普通です。

そんな状態の子どもたちを整列させ、入場させようとしても難しいものです。そこで当園では、入場行進をせず、最初から園庭の真ん中に子どもたちが集合します。家族の場所からグラウンドの中に移動をするだけです。乳児は保護者が抱っこして参加します。

これから入場行進をする、と身構えるのではなく、いつもと全く違う雰囲気の園庭に身をなじませるように、ゆったりと子どもたちが集まってきます。全員が集まったら、そのまま一曲行進して開会式を始めます。歩くことによっ

て、子どもなりに緊張していた心と体をほぐしていきます。ほぐれていくに従って運動会へ向けての気持ちが高まっていき、始まりの言葉を自分たちで宣言することによって、さらに場を盛り上げていきます。そんなところに大人のあいさつは場違いです。ですから、当園では大人のあいさつがないのです。

かといって園長がひと言もあいさつしないというのは失礼ではないか、と思われるかもしれません。それも一理あります。保護者や来賓の方が大勢集まっているのに、園長が黙ったまま座っているだけでは、失礼と思われても仕方ありません。そのことを考慮して、園長のあいさつは、開会式ではなく、その数分前、子どもたちが三々五々集まってくる時間帯を見計らって行います。ワイヤレスのハンドマイクを使い、あいさつと形式張らず、話しかけるような口調で、子どもや集まった方々へ向けて語りかけます。グラウンドを囲んで保護者は座っていますから、全方向に向きながら語ることを忘れないように心がけています。また、来賓には、すべての競技が終わった後の閉会式で、子どもたちへのねぎらいの言葉と万歳三唱の発声をお願いしています。当園ではこのようなやり方をしていますが、開会式で大人のあいさつがないことについて、特に問題が生じたことはありません。

運動会は子どもが主役、そのためのちょっとした工夫をしている開会式です。

（鹿児島国際大学准教授・元安良保育園園長）

幼稚園の源流を求める旅

森有礼の第二次在米時代(8)

ニューヘイヴンへ

国吉　栄

ニューヘイヴンの森有礼

全米教育協会大会に参加してからおよそ三か月過ぎた一八七二年十月末、森有礼は津田梅子をランマンに託し、十二歳の山川捨松と永井繁子を伴って、夜行列車でコネティカット州ニューヘイヴン(New Haven)へ向かった。

二〇〇八年の旅の最後に、私もニューヘイヴンに向かった。ニューヨークからなら列車で一時間半ほどの距離である。久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』(1988)は著者の曽祖母にあたる捨松の生涯を描いたもので、捨松が青春時代を過ごしたニューヘイヴンでの新たな資料発掘は森研究にとっても貴重である。ニューヘイヴンでは、私も捨松の受け入れ家庭となったベーコン牧師の資料をまず見せていただこうと思っていた。

ニューヘイヴンの街の中心を占めるのはイェール大学である。そのSterling Memorial Libraryに、ベーコン牧師ほか森に関係する人物たちの資料がある。最初の日に、同図書館のManuscripts and Archivesの部屋の受付で資料

を撮影してもいいかと尋ねると、COPY Manuscript and Archives, Yale University Libraryと印字された紙片を渡された。この部屋の資料はカットごとにクレジットを入れて撮影することになっているのだ。米国の図書館は、日本と違い、閲覧者自身による写真撮影を許可している所が多いので、私のような研究費をもたない者には大変ありがたい。二日目からはすっかり顔を覚えてくれ、部屋に入るとすぐにシールを渡してくれるようになった。手書きの読みにくい文字を教えていただいたりもした。

手書き資料はパーソナルな内容であることが多く、文字そのものにその人が感じられるので、活字の資料を見るのとは異なる感覚がある。日記や手紙など、本当にそんな個人的なものを読んでいいのだろうか、失礼して読ませていただきます、という思いである。

ベーコン牧師は手帳に日録を記していた。一年に一冊、革表紙の小型の手帳である。空白の日も多いが、幸いこのあたりは記入がある。私の目に飛び込んでくるのは、どうしても森の名前である。

1872/10/31 Thursday　The two Japanese girls came today. Mr. Mori the Jap.[86] ambassador dined with us.

捨松と繁子を連れてきた森は、少女たちとベーコン家で食事を共にしたという。彼女たちも心強かったであろう。その翌日の欄に思いがけない記述があった。

Mr. Mori send to a meeting of gentlemen at Sec. Northrop's his propose memorial to Prime Minister of Japan on Religious Liberty.

コネティカット州教育長ノースロップ宅で開かれた会合で、森が一同に*Religious Freedom in Japan*の草稿を見せたというのである。太政大臣三条実美に宛てた信教の自由を求める請願とその憲章草案である。

森は少し前にピーボディーのいとこにも、この草稿を見せていた。国務長官フィッシュにも草稿を渡して意見を求めていた。二〇〇六年、私はたまたま議会図書館で、フィッシュが森に草稿を返却した際に同封した手紙を発見した。「原理的な問題で意見の異なる点はありますが、宗教的寛容、思想・良心の自由という重要な問題についての立場の健全さには、まったく異論はありません。明

確に、力強く、哲学的に論じられていると思います。もしこれが受け入れられるなら、古くしかし進歩的な御国にとってどんなに幸いでありましょう。あなたが御国の憲法にリベラルな思想を刻むために尊い努力をしてきたことは、あなたにとって永遠の名誉となるでしょう」。

森は絶えず目標に向かっていた。

ドゥアイの手紙

この部屋に通って何日目のことだったろう。

Whitney, William Dwight, Family Papersの書簡の箱を机の上に置き、収められている手紙に目を通していた。必要な資料の撮影はもう済ませていたが、まだ時間があった。書簡類はコレクションごとに主だった差出人名が目録化されていて、閲覧室手前の調査室で見ることができる。すでに思いつく名前は目録であたっていたが、特にこれはと思うものはなかったから、その時具体的な何かを探していたわけではない。ただ、何となく未知の資料に出合えたらいいな、というほどの気持ちだった。

一通ずつざっと目を通していると、発信地がNewarkとなっている手紙があった。Newark ?　はっとした。急いで頁をめくって末尾の差出人名を見ると、D. Adolf Douaiとあった。こんなところでDouaiに出会うとは。

アドルフ・ドゥアイは、ニューヨーク州ニューアークのジャーマン・イングリッシュ・アカデミーの校長で、*The kindergarten*の著者である。同書は東京女子師範学校に幼稚園を創設するに際し、わが国で最初に完訳された幼稚園文献で、邦題は『幼稚園記』。訳したのが関信三であった。私は椅子に座り直し、最初からていねいに読み始めた。

一八七三年一月十六日付、イェール大学言語学教授ホイットニー宛書簡である。端正な筆跡に似つかわしくないDear Sir !という書き出しに、何ごとかと思った。「前回のアメリカ言語学会でお会いしたのを覚えておいでしたら、私が教則本付英語読本シリーズの著者であることも思い出していただけるのではないかと思います」。これはホイットニーへの初めての手紙なのだ。ホイット

ニーはアメリカ言語学会の会長であった。

「一月十五日付の*New York Tribune*紙で、日本公使の森有礼氏があなたに宛てた手紙を読みました」。英語を簡略化して日本に取り入れるという考えについて、森がホイットニーに意見を求めた手紙である。

「森氏と私が同じ改革をめざしていることは衝撃です。英語の教授法を簡略化することに、私は人生の二十年を費やしてきました。私は日本国民のために森氏がなそうとしている計画を、比較言語学と合理的教育学の成果に基づいて立案する上でお役に立つと思います」。

「あなたは森氏の目的に関心をおもちのようですので、ご高覧に付し森氏にご推薦いただくために、失礼を省みず私の英語教本をお送りいたします（私の本の出版人であるニューヨークのシュタイガー氏に、用意ができ次第、私の英語の本をすべてあなたにお送りするよう指示しました）。そこに書かれている計画は私が森氏に推薦すべきものとは違いますが、少なくとも幾つかの重要な点で一致しています。できるだけ早く、ご都合の良い時に、短いお返事をいただければ幸いです。

敬具　アドルフ・ドゥアイ」

ドゥアイはホイットニーに森への仲介を必死に頼んでいた。ホイットニーの返事はわからない。しかし返事がいかにあれ、シュタイガーは間違いなく森にドゥアイの本を届けた。なぜなら、これ以降、両者の間に通信が開始されるからである。のみならず、わが国の国会図書館には一八七二年版のドゥアイの英語教本と、同じく同年に出版された*The Kindergarten*第四版が存在している。

森は、彼が大いに関心を抱き、にもかかわらず思うような提案を得られなかった英語問題を通してドゥアイと知り合い、ドゥアイを通して、幼稚園文献の出版人であり、フレーベル考案の遊具「恩物」の製作販売者であるシュタイガーとつながったのである。森有礼とドゥアイとシュタイガーと幼稚園。私は書籍で埋まった古い図書室の椅子の背にもたれ、高い天井を見上げた。日本幼稚園史の大きな謎が解けていくような気がした。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）

教育学者のあたふた子育て・親育ち(3)

子どもをもたない保育者の専門性とは(1)

佐久間亜紀

前回（本誌二・三月号）、編集部からこの連載のお話をいただいた時、最初はお断りしていたと記しました。私の胸中は、とても複雑だったのです。

実は、私にはなかなか子どもができませんでした。結婚して八年以上、赤ちゃんがほしい自分と、授からない現実とのはざまで苦しみ続け、いろいろなことを考えました。でも、人生というのは本当に、予想外のことが起こるものなのですね。泣いて泣いて、やっとの思いで心に整理をつけ、子どものいない人生を歩んでいこうと素直に思えるようになったころ、思いがけず赤ちゃんを授かることになったのです。もちろん、出産してから私の人生は激変し、いまの私にとって、娘はとても大きな存在となっています。ところが同時に、子どもを授からないまま生きていたはずの人生も、激変どころか紙一重の違いに過ぎないものに感じられ、とてもリアルで大きな存在なのです。出産したからといって、「母となった自分」だけを前面に押しだすことは、「母でなかった自分」を否定するようにも思われ、大きな葛藤を感じずにはいられませんでした。

ただ、いまの私には、コウノトリを待ち続けた長い長い歳月は、私にとってどうしても必要な、大切な時間だったと思えます。そして、そのころに感じたり、考えたりしたことは、絶対に忘れられない貴重な財産となっています。特に、「子どものいないあなたに、教育の何がわかる」という批判を、陰に陽に何度も投げかけられる中で、保育者や教師の専門性について、多くのことを考えました。

最終的に、この連載をお引き受けすることにしたのは、「母でなかった私」も含みこんだ私の思索を語ることで、ほんの少しでも誰かのお役にたてるなら、これほどありがたいことはないと思ったからです。少し重いテーマになりますが、ほんの少しだけ、おつきあいいただきたいと思います。

自分をまるごと否定される苦しみ

赤ちゃんを待ち望んでいたころの毎日を思い出すと、いまでもちょっぴり、つらくなります。いまでこそ、不妊も堂々と語られるようになり、社会の理解も進んできているように思いますが、当時の風潮はいまよりずっと厳しいものでした。

「子どもはまだ?」という何気ない質問に、私自身が焦りや不安を感じるようになると、周囲からたくさんのコメントやアドバイスが寄せられるようになりました。いわく、「仕事しすぎなんじゃないの?」「ちゃんとした食事をしているの?」「スーツとか身体を締めつけるような服がいけないんじゃない?」「ストレスを感じるのがよくないってよ」「子どもをあきらめたら妊娠したって聞いたよ」。

親戚や友人が親身になって心配してくれる気持ちは、とてもありがたく感じられました。でも、それらの言葉は、しだいに私を追いつめていくようになりました。会う人会う人、みんなが「仕事をしている私がいけない」「食べているものがいけない」「服

装がいけない」「ストレスを感じるような精神の在り方がいけない」――こう言っているように感じられたのです。そして挙げ句の果てには「子どもが欲しいと思うこと自体もいけない」「子どもがいないのはもっといけない」と。いったいどうすればよいというのでしょう。まるで、いまの私のすべてがダメだと、世界中から否定されているようでした。「子どもがいない」というのは、「わたし」の属性の一つにすぎないはずなのに、まるで「子どもがいない」という一点だけで、「わたし」の存在価値がまるごと否定されているようなのです。

職場での経験

しかも何の因果か、私は子どもが本当に大好きで、子どもとかかわることを仕事にまでしてしまっていました。職場に行ってまでも、自分に子どもがいないという事実に向き合わざるを得ない生活が、延々と続いたのです。当時の私に、逃げ場はありませんでした。

幸いなことに、大学にいれば乳幼児には会わずに済みましたし、同僚の多くは、私が妊娠しないことには、あえて触れずにいてくれました。ですが、若い学生たちにそんな配慮などあるはずがありません。普段の私が、学生からみて親しみやすい存在だったこともあったのでしょうが、彼らの言動は、あまりにも率直で容赦ないものでした。

ある学生からは「佐久間先生はそんなに子どもが好きなのに、どうして子どもを産まないんですか。子どもを産まないと、教育のことなんかわからないんじゃないですか」と、まるで諭されるように、強く言われました。前途に満ちたその若い学生には、思い通りにならない人生があるなんてことは、想像すらできなかったのでしょう。当のその学生たちのために、どれだけ仕事が増えていたかわからないと

いうのに、本人に感謝されるどころか、批判されている自分が、あまりにも情けなく思われました。

また別の学生は、突然私の研究室にやってきて、「僕は高校時代に、こんな素晴らしい授業を受けたことがあります。先生はどう思われますか」と、黄ばんだプリントを差し出しました。それは高校の道徳の授業のプリントで、当時はまだいまほど一般的にはなっていなかった不妊治療について、「人間が命を操作してよいのか」と、ストレートに批判する内容のものでした。本当なら、学生の気持ちを受け止めたうえで、私の状況を率直に打ち明け、プリントの内容について語り合うべきだということは、頭ではわかっていました。でも、当時の私には、そんな心の余裕は全く残っておらず、正直なところ、もう本当に勘弁してくれ、と泣き出したい気持ちでした。私がどんな反応をするのかを、この学生が試しに来ているように感じたのです。

幼稚園での経験

特にしんどい思いをしたのは——保育の関係者である読者諸氏には大変申し訳ないのですが——、仕事で幼稚園に行かなければならない時でした。当時の私の生活圏の中で、幼稚園ほど「女性性」に満ちた場は、ほかになかったのです。

「うらやむという言葉は、裏で病むということだ」と、聞いたことがありますが、いまから考えれば、当時の私の心は本当に「裏で病んでいた」のだと思います。子どもたちの輝く笑顔を見るたびに、私には子どもがいないんだという暗い思いが、心の中で闇のように広がってゆくのを感じました。お迎えにくるママたちの中には、兄弟姉妹を身ごもっている妊婦さんも少なくなく、その大きくせり出したお腹は、ゆさゆさと揺れながら、ものすごい勢いで私に迫ってくるように感じられました。また、私を迎え

る園の先生方からは、決まって「佐久間先生のお子さんは何歳ですか」と尋ねられました。そのたびに「私にはまだ……」と答えなければならず、相手の先生が申し訳なさそうな顔になると、こちらも申し訳なさでいっぱいになりました。「あら、お子さんいないんですか」と明らかに落胆されたり、「早く産まないと大変ですよ」と年配の先生からアドバイスされたりした時は、私の身体は幾重にも小さくしぼみ、このまま消えてしまいたいと思ったものでした。

保育者と不妊

保育の現場にも、なかなか自分の赤ちゃんができないと悩むスタッフがたくさんいて、しんどい毎日を送っているのではないでしょうか。私にとって、何にもましてつらかったのは、前述の学生の言動のように、私自身に子どもがいないせいで、職場での仕事に対する評価さえも低められているように感じられた時でした。保育の現場ではなおさら、同様の評価にさらされやすいことでしょう。

女性性とかかわりが深い専門職にとっては、自分自身に子どもがいないということが単に外からの評価に不利に作用するだけでなく、自分自身の内側の苦しみを深めてしまう場合も多いので、本当につらいのです。

究極のつらさは、たとえば助産師さんでしょう。以前イギリスのテレビで、不妊に苦しむ助産師さんを追ったドキュメンタリーを見たことがあります。助産師としての力量を高めることに力を注ぎ、妊婦さんのために尽力してきた彼女は、いざ自分の子どもを望んだ時に、なかなか授からないという現実に直面してしまったのです。しかもその苦悩の中でなお、ほかの女性の出産に自ら立ち会い、幸せいっぱいの母親たちの産後のケアをしていかなければなりません。悲しみと嫉妬と羨望と、いろいろな気持ち

が心を渦巻き、「ケアされたいのは自分のほうなのに」と泣いていました。仕事を辞めてしまえば、その意味では気持ちは楽になりますが、それでは、それまでの自分が力を注いできたもの、すべてを捨てることになってしまいます。それにもかかわらず、職場の理解は充分とはいえず、24時間体制が求められる過酷な勤務シフトの中で、妊娠した助産師や、子育てに追われる助産師への配慮がどうしても優先されてしまい、彼女のようにこれから妊娠したい助産師に、夜勤などの負担が一層重くのしかかっている、というのが現実なのでした。

コウノトリの到来を待ち望む保育スタッフの思いは、いかばかりかと祈るような気持ちにならざるを得ません。妊娠中や育休明けのスタッフに、手厚い配慮が必要なのはいうまでもありませんが、独身スタッフや、これから親になりたいと願うスタッフへの配慮も、同じように大切なことです。どの園の経営も厳しく、課題は山積していますが、少なくとも精神的な面だけでも、すべてのスタッフにとって思いやりと配慮のある職場を、みんなでつくっていきたいものです。二人目不妊で悩んでいるママやパパも少なくありませんから、保育者同士がケアしあい、ありのままの姿を受け入る雰囲気がつくられている職場では、きっと保護者への配慮も深まり、保育の質も高まっていくに違いありません。

子どものいない保育者の専門性とは

それにしても、いったい、子どものいない保育者の専門性は、子どもを産み育てている保育者の専門性よりも、本当に劣るのでしょうか。なぜ、私も含めて多くの人は、自分の子どもをみてくださる保育者に、子どもがいるかどうかが気になってしまうのでしょうか。—次号に続く—

（上越教育大学准教授）

保育の現場から

自然の中の子ども　子どもの中の自然

―安曇野里山だより―

依田敬子

「紅葉、きれいだよね」と二人の子どもが話します。「葉っぱが全部落ちたら、冬だよね」舞い落ちる木の葉の下を歩きながら、Hがおばあちゃんの言葉を思い出して言いました。「くじら雲」で過ごす子どもたちは、会話の中に自然物だけでなく、自然の移り変わりを表すことが多くなります。それは、子どもたちを成長させた環境がどんなものなのかを表しているのだと思います。

人は一人ひとり感じることや考えることが違います。子どもたちもそうです。同じ所で毎日を過ごしても、興味をもつことは違います。Tはずっと虫や小さな生き物に興味をもっていましたが、最近は植物に興味をもち始めています。歩きながら、雑草を一本ずつ根っこから引き抜いて集めたり、種を集めたり、芽を出したどんぐりや小さなクヌギの苗木をプランターに植えたりしています。こんなふうに一人ひとりのペースで学んでいくことができたら、どんなに意欲的に学ぶことができることでしょう。

「くじら雲」は、長野県安曇野市明科の押野山（標高約600m）を拠点に三～五歳児20名程が活動をしています。

「くじら雲」がある押野山の頂上には桜の木が十本くらいあり、四月半ばごろに満開となります。この山では、普段は地元でも限られた人しか見かけませんが、桜の季節の週末には珍しく観光客らしき人たちが来ます。その人たちは、この山の名前が押野山だとは知らず、遠くから頂上の桜色を見て訪れるのです。そんなどこか取り残されたような里山の中腹に、四十年前まで養蚕農家だった一軒の家があります。その古い民家が「くじら雲」の園舎です。ここに来る人は幼稚園というより「依田さんち」に来たという感じがすると言います。田舎のおばあちゃんちという雰囲気があります。実際に卒園児は「ただいま」と言ってきます。そんな時は、私も久しぶりに孫に会うおばあちゃんになった気分です。

春は、毎朝焚き火をして、子どもたちを迎えます。リュックサックと長靴姿の子どもたちが家族と一緒に駐車場から畑の横を通って歩いてきます。

夏は、川や渓谷で一日を過ごします。

しだいに体力をつける子どもたちは、秋から冬にかけて押野山のふもとから「くじら雲」まで片道約2㎞の山道を歩いて往復します。

「くじら雲」の保育の特徴は、少人数で異年齢の集団ということ、親参加型ということ、日常的に野外を中心とした活動や昔ながらの里山生活をするということです。

「くじら雲」では、雨が降ってもレインコートを着て、山道を歩いたり、外で過ごしたりします。あまり雨が強い時は、お弁当を屋根の下で食べることがありますが、子どもたちはいつも通り、鬼ごっこやままごとをして遊んだり、雨の日ならではの遊びを楽しんだりします。ある時、工事に興味をもっているCが泥んこになって遊んでいました。昼食の前に着替えをしようと土間で汚れた衣服を脱ぎました（土間には薪ストーブがあり、肌寒い時は重宝しています）。そして、土間にある流しで泥んこの手を洗ってあげました。すると、Cが「依田さんちは、いいね。土間に水道があって」と言いました。何気ない会話ですが、私はこの言葉から、Cがここを「おうち」

だと思っていることと、Cの中に土間の生活が存在し始めたことを感じ、うれしく思いました。

このような昔の生活を子どもたちとしているのが、「くじら雲」です。子どもたちの家族も参加したい時に参加しています。

Sは年少の秋から「くじら雲」へ来るようになりました。姉が年長にいたので、以前からたびたび「くじら雲」に参加していました。しかし、毎日、年長や年中の子たちと同じようにリュックサックを背負って山道を登ることは初めての経験でした。体力的な負担を軽くするためにリュックサックを代わりに持ってあげようと提案しますが、「いい」と言って頑張る姿が見られました。そして、姉たちの足取りについていこうと後から小走りに行くのでした。そうやって毎日、北アルプスの山々を眺めながら田んぼのあぜ道を通り、山道の木々の中を歩いて行きました。そのコースは車の通行が少なく、のんびりとそれぞれのペースで歩くことができます。

冬になるころ、Sは姉たちの集団から離れ、私と手をつないで歩くようになりました。歩きながら、日々の思いを話すようになりました。ある時は「今日、パパに怒られた。もっと寝ていたかったのに」と言いました。別の日「ママ、東京に行ったんだよ。夜にならないと帰ってこないんだ。夜、ご飯、食べられないと思う？　でも、大丈夫なんだよ。パパが作ってくれるんだ」。そうした毎日を過ごす中で「今日、お弁当、一緒に食べよう」と私に言うようになりました。「くじら雲」ではお弁当を好きな場所で好きな友達と食べるのです。

そんなある日、「くじら雲」に参加していた妹や弟たちの遊んでいた雪の玉がSに当たりました。その時、Sは「くじら雲」へ来て初めて泣きました。いままでの緊張の糸が切れたようにしばらく抱っこされながら、泣いていました。それ以来、Sは自分のペースで過ごすようになりました。年の近い子たちと一緒に遊ぶようになりました。ソリやスキーで遊んだり、雪の上に座って、両腕で雪を小さな山のように集めて「これはゆみちゃんち、これは依田さんち、これはやまんばのうち」と名前をつけ、向かい合って座っていた子と、雪の家の取り合いっこを楽しんだりしました。

「くじら雲」の子どもたちも、いろいろな家庭環境をもっています。そして毎朝うれしい気持ちや悲しい気持ち、いらだつ気持ちなどいろいろな思いをもって来ます。山を眺めたり、雪の上を歩いたり、まつぼっくりを拾ったりして歩いていくと、一日のうちの朝だけでも子どもたちの言葉や語調に変化を感じます。何を言っても「やだ」と、反発していた子が「だって、早帰りしたくないんだもん」と素直に自分の思いを話すようになります。Sのように自分の思いを理解してもらえなかった切ない思いを話す子もいます。山を上がるにつれて笑い声が増えていきます。人の言葉を含めた音が氾濫する環境の中でなく、静けさの中で過ごすことで人は自分の心に向き合い、自分を肯定していくのかと思います。

元気がない子どもの姿を見ると、「どうしたの」と理由を尋ねることがあるかもしれません。励ますこともあるかもしれません。そのような時、「くじら雲」では黙って一緒に山道を歩きます。その子がかかわりを求めてきたらすぐに受け入れられるように様子を観察しています。手を握ってきた子の手や横顔からその子の気持ちを感じます。気持ちや思いを言葉で正確に表すことは難しいことです。特に子どもたちは限られた言葉の中で表します。だから、子どもの言葉だけでその子の状況を理解しようとせず、その子の背景を考えて理解しようと努めます。

Hは「くじら雲」に年少で入園しました。入園したば

かりのHは「くじら雲」の子どもたちに対し「おはよう」の代わりに、戦いを挑むかのような構えをしました。Hが一緒に遊ぼうと子どもたちに近づいていっても、その子たちがHの思いに沿わないと、相手を押したり、物でたたいたりしてしまう姿が見られました。そのようなHの姿を観察していくと、Hが押したり、たたいたりする理由がわかりました。そこでHのそばに何となくいて、Hが近くの子を押そうとしたり、たたこうとしたりする時は、それを止め「○○したいの？」と尋ねました。Hが「うん」とうなずくと「○○したいって言ってごらん」と知らせました。Hはその通り相手に伝え、少しずつ言葉で伝えることが増えていき、たたいたり、押そうとしたりする回数は減ってきました。しかし、その姿は入園してから一年半以上続きました。そのたびに「Hちゃんの手はたたくためにあるんじゃないよ。握手したり、いい子ってするためにあるんだよね」と手を握ったり、抱っこしたりしながら言いました。そうしていくと「Hちゃんの手はどういうふうにするためにあるの？」と聞くと「握手したり、いい子ってするため」と答えるようになりました。

そのうち、Hは甘えてくるようになりました。Hは三歳でしたが赤ちゃんのようにおんぶひもでおんぶをしてほしがりました。Hが「降りる」と言うまでおんぶをする日が続きました。一年目の秋ごろ、Hは何かあると泣くようになりました。それまでのHは泣けなかったのです。泣きたい時は誰かに怒りをぶつけていました。

一年目が終わろうとする三月にみんなで竹やわらを使って小屋を作りました。完成するころ、Hがその小屋を独り占めして、ほかの子を追い出そうとしました。するとほかの子たちがHに文句を言いました。Hは怒って文句を言う子を押し始めました。そして取っ組み合いのけんかになりました。大きい子が一対一で取っ組み合いをするよう審判の役目をしました。ところが二人とも泣いてしまいました。大きい子は話し合いをすることにしました。すると「みんなのうちだから、独り占めはいけないと思う」という意見が多く出ました。それを聞いたHは

怒ってその場を離れ、近くの木に登ってしばらくみんなの様子を見ていました。ほかの子たちはHをよそにその場で過ごしていました。しばらくして、Hは「さっきはごめんね」とみんなに言ってきました。みんなは「いいよ」と言い、Hを受け入れました。

人に傷つけられるのを怖れていたHが、かたくなな心を徐々にほぐし、自分の思いを素直に出すようになっていきました。そうできたのは、保育者のかかわりだけでなく、子どもたちの保護者が保育者同様Hの思いを理解しようとしたからだと思います。Hはたくさんの大人にかわいがられ、人を信頼していったのです。大人がどのように子どもを理解するかで、子ども同士の関係も変わってきます。誰かを傷つけようとする子どもはいません。もし、そうする子がいたなら、その子はもっと傷ついているのだと思います。

Hが「くじら雲」で過ごして二年目の二月のことでした。一月から入ったばかりの年中児Jと年長児Tがけんかをして、Jが泣いてしまいました。Hはそのけんかを見ていて、心配そうにJのそばにいて声をかけていました。しかし、Jは何も言いませんでした。すると、Hは私の所へ「Jくんが泣いてる。Tくんが怒った」と知らせに来ました。Hがそのように困っている友達のことを知らせてきたのはそれが初めてでした。また、別の日、Hが道に手袋を置くと、それを知らずにほかの子が踏んでしまいました。Hは「手袋、置いてあるんだから、踏まないで」と言いました。当たり前のことですが、自分の思いを言葉で伝えることができたと私はうれしくなりました。

自然は子どもたちの感覚を育てるのによい環境です。自然の中で過ごしていると気持ちも安定してきます。しかし、子どもたちが安心して心を開き、素直に表現することができるのは、大人がどのようにそばで寄り添うかによります。子どもの成長には自然と共に子どもに信頼される大人の存在が必要なのだと思います。

（NPO法人　響育の山里　くじら雲代表）

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(46)〉

「幼保プロジェクト」の成果と今後(2)

浜口順子

総合的保育者のイメージ

二〇〇六（平成十八）年度からお茶の水女子大学（以下、お茶大）で、四年をかけて進められてきた研究「幼保の発達を見通したカリキュラム開発（幼保プロジェクト）」は、職業的保育者のみならず、社会や家庭においていかなる役割を担う人になっても必要な「総合的保育者」としての資質の存在を仮定し、学部段階における、その養成方法について探求を続けてきた。

一般的に「保育者養成」といえば、プロの保育者になるために必要な資格取得を目的とする「プレ・サービス・トレーニング」と、現職者となってからさらに保育的資質を向上させるために行う「イン・サービス・トレーニング」とを合わせて意味する。しかし、私たちのプロジェクトでは、これに加えて、もう一つ、むしろその両者の基盤となるべき、（アマチュアも含む）保育者養成の形を問わざるを得なかった。

お茶大で、保育に関心のある学生が幼稚園の教員資格を取得しても、官庁や地方自治体、一般企業などに就職したり、大学院への進学を選んだりする場合が多い。その大学院も「保育・児童学」コースとは限らず、「発達臨床心理学」コースでカウンセラーの資格をと

る道に進む人も少なくない。

こうした実態を踏まえて、たとえ職業として保育者を選ばなくても、教職課程を履修したり保育学・児童学などを専門課程で学んだりする経験が、社会人になる上で有意義であると考え、また、よりそのような成果に導けるようなカリキュラム編成を目指すというのが、「総合的保育者」育成の基本コンセプトとなった。

それではいったい「総合的保育者」とは具体的にどのような人のことを指すのだろうか。塩崎は本誌において、「『保育』にかかわるさまざまな領域をコーディネートする力量」[注1]をもつ人として論じたことがある。もとよりプロフェッショナルな保育者の資質と無関係ではない。それどころか、保育者の専門性を育成し豊かに実らせる上で不可欠な基本的資質を有する人のことであると考える。たとえば、自らが親となった場合、あるいは身近に子育てをする人がいる場合、また、日常的な場面で子どもとかかわる場合、はたまた子どもが育つ社会環境をよりよいものにするための策を考案したり実施したりできるような立場に立った場合など、さまざまな場において「総合的保育者」の資質ある人材が必要となるに違いないのである。まだ充分整理されていないが、幾つかの特質をあげてみる。

○関係性

・大人としての自立・自律性がある
・子どもの自発性が生き生きとする関係を創造する
・周囲の人（子どもを含む）への共感性が豊かである
・人と人がつながる経験を求め信頼する
・自らの大人性に自覚的である
・地域や自治体による（保育・福祉・教育等の）サービスに関心を抱き、知識と理解があり、個を生かす方向で望ましい（人的・物的・組織的）環境をつくることに知恵を発揮できる
・身近な子どもだけでなく、職場の同僚の子ども、地域や社会、ひいては世界における子どもたちの生命、成長、からだ、夢を守ろうとする責任をわきまえ、具体的に実現しようとする

○価値観

・いまを充実させることを優先し、過去や未来のことにとらわれすぎない。

・保育的関係を人間性において尊重する

・周囲の人や機関と連携をとることに価値を見出す。

専門性と総合性

子を育てるという行為は、生物学的には種の保存にかかる本能的活動である。人以外に育児や教育のことで四苦八苦しているような動物はない。人間だけが、育児や教育について、理念や方法をどうしたものかと悩んでいる。ことに、産業化都市化された現代社会に至ると、「母性」「アタッチメント」などの言葉によって、子育ては、労働と家事の間のグレーゾーンに押しやられ（主に女性の仕事となり）、不当に価値を低められた格好になっている。小学校以上の教諭に比べ不当に低い賃金で働く保育者たち。また最近の保育所設置基準の引き下げなど、日本の状況は先進国の中でも特に深刻な状態である。

「見えない教育方法」（バーンステイン）という言葉で、幼児期教育の特質が小学校以上の教育方法と差異化され評価される傾向が生じてきたとはいえ、「専門性」というテーマ自体、知識・技術等の可視的基準によって語られるのが一般的である。また、子育てが「生活の自立・自存を中心とする」暮らし部分とかかわっており、しかも不払いの働きであることによって、[注2]乳幼児の教育・保育者の専門性への評価は、現代の労働観によっても不利な位置にある。

保育者の専門性は、医師や弁護士のそれと質が異なるのではないか。にもかかわらず、これまでそれらと同列の文脈上で、プロの保育者養成方法が検討されてきたのではないか。実習・事前事後指導の増加と充実、履修科目の多様化、授業の少人数化などの方策がそれ自体重要であることは確かであろうが、それに加えて学生が自発的に考える時間や、多様な人とかかわる場、現職者相互による啓発的な探求等を保証するカ

リキュラムが検討されてはどうか。

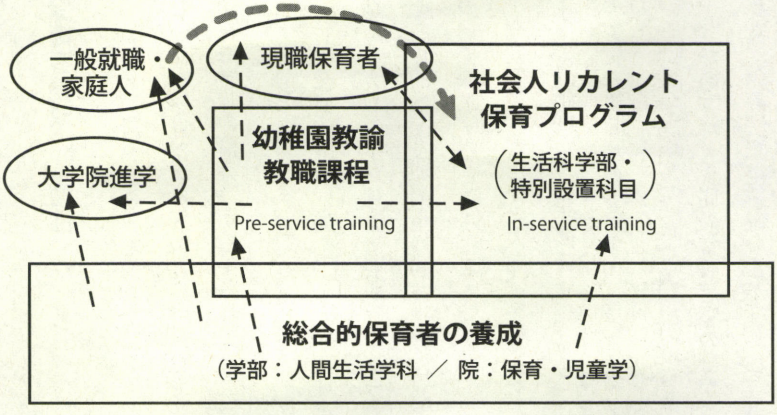
保育者養成の二層性

二〇一〇年度から、お茶大では、特別経費による新しい保育プロジェクト「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」が着手されている（六か年計画）。二〇〇九年度で終了した私たちの「幼保プロジェクト」の発展的継承に加え、今度は、社会人向けの循環型（リカレント）保育者養成プログラムが統合され、その目的は、長期的生涯的な視野に立った保育者育成の形を探求するところにある。

今回開設された社会人向けプログラムの前身として、二〇〇五年度から五年間続いた、アップリカ葛西（株）の寄付による現職者対象の「チャイルド　ケア　アンド　エデュケーション講座～子どもの幸せ学の探究～」があった。夜間の常設講座のほかに、土曜フォーラム、免許法認定講習などが行われ、現職保育者、主婦、保育行政関係者など多様な人たちの参加をみた。常設講座では、通常の現職研修とは違い、単位を取得することができる（大学評価・学位授与機構からの単位認定可）。その上、脳科学や音楽療法、比較保育学、環境工学などの、現代的な目新しいカリキュラムが用意され、受講者から高い評価を得てきた。

この寄付講座が二〇〇九年度に終了したのを機に、これまでの運営ノウハウを引き継ぎつつ、お茶大が独自に開講する社会人プログラムの創設に踏み切ることができた。これによって、図（次ページ参照）にあるように、三つの質の違うタイプの保育者養成が統合実現されることになった。

二〇一〇年度の社会人プログラム（正式には生活科学部の特別設置科目であり、「現代の乳幼児教育・保育探究プログラム」として開講）においては、たとえば「乳幼児保育マネージメント」「コミュニティ保育資源の活用」などの現場に即したテーマを反映させた科目を配置するほか（基本的に夜間開講）、学部学生も自由科目として単位認定されるため、現職人・社会



図：お茶大の保育者養成コンセプト

2010 ～ 2015 年度　特別経費
「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」研究プロジェクトの構造
（ECCELL: Early childhood care /education and lifelong learning）

人・家庭人・学生という、多様な構成員による共同的学びの場が展開されている。そのほか、特別企画のフォーラムも、夏季冬季などに予定されている。

私は今年（二〇一〇年）六月に東京で開催された「第十三回ＯＥＣＤ（経済開発協力機構）日本セミナー」に参加したが、「職業的専門性の発達と幼児保育における管理・リーダーシップ力の獲得」が中心テーマであった。つまり、多くの先進国では、社会経済的な基盤として乳幼児教育への投資がなされ、イン・サービス・トレーニング（現職者教育）の質の向上によって、保育教育政策に弾みをつけようとする傾向が強く反映されていた。日本の保育政策ビジョンは現状認識や問題意識において遅れをとっている面もあるように見受けられた。こうした国際的動向を本学の社会人プログラムは確かに跡付けるだけでなく、「発達障害論」や「子ども理解」等のスタンダードな日常的問題意識にかかわる科目も設置しており、受講者それぞれの体験を交換しながらの和気あいあいとした授

業が進められている。[注3]

第二の保育者養成の形、「幼稚園一種教職課程」であるが、これには本学の専任教員と、附属幼稚園教諭、プロジェクト専任講師、非常勤講師がかかわっている。「幼保プロジェクト」では、月一回程度の例会において、幼稚園教職課程の担当者にも声をかけ、なるべく参加をお願いした。そこでは、主に学生の様子や、使用している教材について情報交換してきたが、多面的に学生を把握できることと、授業内容の偏りを調整していく上で非常に有意義であった。また、本学には保育士養成課程がないため、〇～二歳児の発達や、保育所と幼稚園の比較等の視点を授業の内容に盛り込んでもらうことなど共通認識にしてきた。これらのことは、いまのプロジェクトにおいても継続される。

これら二つの、いわばプロフェッショナルな保育者の養成を下支えしているのが、図の底辺にあたる「総合的保育者養成」となる。これは、人間生活学科の実習、観察の授業や、保育・臨床系の専門的な授業、また「たまり場」「プレイルーム」などの集う場の創造という形で徐々に見える形をなしてきた。今後の総合的保育者養成については、その教育方法の体系化、評価方法の検討等、残されている課題は大きい。ノン・プロを視野に入れた保育者の資質・専門性の養成は、女性の生き方、労働観、社会における子ども・育児観を問い直すことと切り離すことができないだろう。

（お茶の水女子大学大学院准教授）

注

1　塩崎美穂（二〇〇七）「総合的保育者」の養成に向けて『幼児の教育』第一〇六巻第六号

2　I．イリイチ著　玉野井芳郎訳『シャドウ・ワーク』岩波書店　一九九八年

3　本プログラムに関心のある方はお茶大事務までご連絡ください（科目等履修生として登録する形になります）。大学HPもご参照ください。

＊この連載は今回で終了いたします。

編集後記

生きてうごめくものを言葉にして掬(すく)い取ると、たいていは網の上に仕留められた金魚のように息苦しさを覚えるのに、なぜか、倉橋の言葉はかえって、忘れていたうごめきや生気を思い起こさせる。今月の「さながら」という言葉もまさにそうで、どんな生活も、凍てついた川面の下をちょろちょろと流れ続ける小川の水のように、止まっているようで動いている。

「さ・ながら」の、流れや永さを連想させる響きのせいか、そこには「いつも過程の最中です」という感じのやさしい時間のイメージがある。『特集』に寄稿された先生方の文章の中にも流動のイメージが見受けられる。サナガラ、サナガラと流れる時間は少しのんべんだらりとしていて、こちらを待っていてくれる人のよさがある。(H)

幼児の教育 第109巻 第10号

平成22年10月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集担当 金子めぐみ・田中恭子
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社フレーベル館
☎03-5395-6604(編集)
振 替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定 価 550円(本体524円)

©日本幼稚園協会 2010 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館
表紙絵 後宮ひろみ
扉題字 津守 眞
本文カット 田崎トシ子
編集スタッフ 吉岡晶子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613(営業)

次号予告

〈特集〉いま、倉橋と出会う 10
「子どもの心のはだ」

土屋とく・下山田裕彦・白井貴之・山下紗織
●インタビュー● 森上史朗

☆次号の内容は、都合により変更される場合があります。

『幼児の教育』バックナンバーがネットでご覧になれます!

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"
http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/
へ、アクセスしてください。
明治34年発行の創刊号から、現在、平成19年発行の第106巻まで公開されています。ご意見・ご感想などは、youjimail@yahoo.co.jpまでお寄せください。

好評発売中

55冊の絵本紹介！ 読み聞かせのアイデア、エッセイまで！
読み聞かせの達人による、絵本ガイドブック

聞かせ屋。けいたろう

絵本カルボナーラ

～ おいしい絵本を召し上がれ！ ～

絵本を子どもにも大人にも！

著者が読んできた秘伝の 55 冊の絵本を、オールカラーで掲載。作品紹介、読み聞かせの Q&A からテクニック紹介まで。読み聞かせの活動を通した、新たな絵本の魅力が満載の 1 冊！

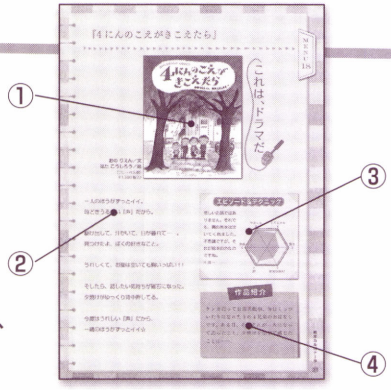
聞かせ屋。けいたろう／著

21×15cm　96 ページ　定価 1,260 円（税込）

10921

作品内容、読み聞かせのエピソード&テクニックや、はたまた、読み聞かせ実況中継まで！
素敵な絵本との再会をお届けします。

① 絵本表紙
② けいたろうコメント
③ 読み聞かせのエピソード&テクニック、作品データ
④ 作品紹介



キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇九巻　第十号　平成二十二年十月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

好評発売中

● シリーズ３巻完結！ ●

総勢101人から贈られた、保育へのメッセージ

THE保育 −101の提言− vol.3

無藤 隆　編著

10503

26×19cm　226ページ　定価2,100円（税込）

21世紀の子どもの育ちをどう捉え、どう見据えていくか、様々な分野の著名人による保育への提言。vol.3は、フレーベル館の保育図書編集委員のほか、保育研究者や各界の著名人の提言も掲載した完結編。

執筆者（50音順）

網野武博（東京家政大学教授）、池谷祐二（脳科学者）、池谷奉文（日本生態系協会会長）、石津ちひろ（絵本作家）、内田麟太郎（絵詞作家・詩人）、大澤　力（東京家政大学教授）、大日向雅美（恵泉女学園大学大学院教授）、岡本拡子（高崎健康福祉大学短期大学部教授）、落合恵子（作家・クレヨンハウス代表取締役）、かづきれいこ（フェイシャルセラピスト・歯学博士）、金井真介（ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン代表）、上遠恵子（レイチェル・カーソン日本協会会長）、小林紀子（青山学院大学教授）、古賀稔彦（柔道家）、小菅正夫（獣医師・旭山動物園前園長）、佐伯一弥（東京家政大学短期大学部専任講師）、佐々木宏子（鳴門教育大学名誉教授）、汐見稔幸（白梅学園大学短期大学学長）、柴崎正行（大妻女子大学教授）、鈴木　寛（文部科学副大臣）、鈴木光司（作家）、高橋　和（女流棋士）、ダニエル・カール（タレント）、苫米地英人（脳科学者）、長倉洋海（写真家）、長崎宏子（スポーツコンサルティング会社取締役・元五輪水泳選手）、浜　美枝（女優）、パトリック・ハーラン（タレント「バックンマックン」）、細谷亮太（小児科医・聖路加国際病院副院長）、増田まゆみ（目白大学教授）、師岡　章（白梅学園短期大学教授）、山極寿一（国際霊長類学会会長・京都大学教授）、葉　祥明（絵本作家）、吉村作治（エジプト考古学者）、渡邉眞一（学校法人初音丘学園理事長）

好評発売中

10501

vol.1

【執筆者】

小柴昌俊（ノーベル物理学賞）
椎名誠（小説家）
田原総一朗（ジャーナリスト）
坂東眞理子（評論家）
日野原重明（医者・文化勲章）
やなせたかし（絵本作家）
ほか多数

10502

vol.2

【執筆者】

アグネス・チャン（タレント・日本ユニセフ協会大使）
紺野美沙子（国連開発計画親善大使・女優）
ピーター・バラカン（ブロードキャスター）
村上康成（絵本作家）
米村でんじろう（サイエンスプロデューサー）
ほか多数

定価　五五〇円（本体五一四円）☆

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。